

中禪寺湖における魚類等の放射性セシウム汚染状況調査（平成 31 年度/国庫委託）

横塚哲也・小堀功男・山本祥一郎¹

要 約

福島第一原発事故により拡散した放射性セシウムは東日本の広範囲に降下・沈着し、県内河川湖沼に生息する魚類からも検出された。とりわけ、中禪寺湖の一部の魚類においては放射性セシウム汚染が継続しており、将来の見通しを提示するためには水圏生態系における放射性セシウムの動態解明が不可欠である。そこで本研究では、(国研)水産研究・教育機構中央水産研究所「平成 31 年度内水面生態系における放射性物質の挙動に関する研究」に参画し、魚類等のセシウム 137 濃度を調査した。

ホンマス、ブラウントラウト、レイクトラウト、ニジマス、カジカ、ヨシノボリ、スジエビ、ヌカエビを調査対象種とし、ゲルマニウム半導体検出器を用いてセシウム 137 濃度を測定した。セシウム 137 濃度の測定は、中央水産研究所と分担して実施した。

原発事故以降、ほとんどの魚類等においてセシウム 137 濃度の減少傾向が確認されたものの、種によってセシウム 137 濃度の減少速度や個体間変動の大きさに差異が認められており、今後も動態解明に向けた調査研究の継続が必要である。

なお、調査結果の詳細については、(国研)水産研究・教育機構「平成 31 年度海洋生態系の放射性物質挙動調査事業報告書（下記 URL）」に掲載した。

http://www.fra.affrc.go.jp/eq/Nuclear_accident_effects/final_report2019.pdf

(指導環境室)

¹ (国研)水産研究・教育機構中央水産研究所